

井 深 対 談

直感に導かれて・・・（１）

生まれる前からの知り合い

井深 生まれる前から知ってるんだものなあ。ソニーの人の子供たちが学齢になると、毎年、ランドセルをお祝いにあげるのがずっと続いているんだけど、第1回生だった？

樋口 ええ、そうだと思います。

井深 あ、やっぱり。

樋口 妹が5つ下なんですけど、普通はソニーに勤めてるお父さんが、一緒についてランドセルをいただくんですが、妹の時は僕がついて行ったんです（笑い）。

井深 康雄ちゃんがついて行った（笑い）。じゃあ、お父さんの都合が悪かったのかな？

樋口 ええ。何かでいなかったらしくて。みんな揃って講堂のような所でいただくんですが、その時に、ソニーの方たちが吹奏楽を練習しているところにちょうど出会ったんですね。その時以来、どうしても太鼓がやりたくなくて、無理やり太鼓を習わせてもらいました。まだ小学生でしたけど、ソニーのブラスバンドの練習の日にいつも通って、太鼓を教えてもらいました。

井深 へえー、ソニーのブラスバンドの練習の時間に。

樋口 はい。ソニーのブラスバンドは、すごく優秀だったんですね。

井深 ええ。今も優秀ですけどね。あの頃は、コンクールに毎年出てて全国で1位になっている。ああいうバンドの数も少なかったからね。ノンプロというか、そんな感じだったですよ。

樋口 ああそうですね。当時、そんなになかったですね。

今でもランドセルのプレゼントは続いているんですか。

井深 ええ、続いているんですよ。今年で35回ですね。

樋口 もう延べにしたら、膨大な数じゃないですか。

井深 今年、ソニーの全体で用意した数は700何ぼで、本社で私が直接にあげるのが、320人。お父さんがもらって、今年その子供さんがもらっているという、2代にわたっている人が1組だけいましたね。

樋口 もう、そういう方がいらっしゃるんですか！そうですか。

井深 ピアノをやってドラムをやって、それで、NHKの「ステージ101」というのに出てたのは、麻布高校の友達とだったんですか。その辺りをずっと追って話してください、順々に。

樋口 あの時はヴォーカルをやっていました。古くからやっていたのはピアノでしたが、ピアノにいつから触りだしたかという記憶は、自分にはないんですね。ただ、小さい頃の写真を見ますと、おもちゃのピアノを弾いているのとか、ちゃんとしたピアノを弾いているような

のがずいぶんあるんですね。多分、2歳とか3歳の時なんですからけれども。実際、先生にピアノを習い始めたというのは3歳なんです。

やっぱり、バイエルとかチェルニーとかからやらされたんですけど、僕はそれが嫌で、聴いた音楽を何でもピアノで弾くのが好きで、それができたんですね。幼稚園の時も、行き帰りにお歌を歌うので先生がオルガンで伴奏するんですが、その代役を僕が引き受け、代弾きもしてたんです。幸いなことに八長調の曲が多かったんで、ピアノの白鍵だけを使えばいいということで、まあ弾けたんだと思うんですが。

そんなことをしてて、与えられた譜面を演奏するだけではすごく窮屈だったんですね。かといって今のように、たくさんレコードとかラジオやテレビとかがあるわけじゃありませんので、いろんな音楽が聴けたわけではないんですが、とにかく、商店街でちんどん屋さんがやっている音楽でも、学校で流す音楽でも、運動会の時にだけしかやらない音楽でも、聴くとすぐにそれを自分で弾くことができたんですね。どうしてなのか自分では分からないんですが、それを別に特殊なことだとも全然自分では思ったことがないんです。

井深 そういうふうに、誰でもできるものなんだと思ってたわけ？

樋口 はい。それとあと、ピアノは絶対音みたいなのがありまして、例えば、アーの音 今はコンサートピッチ 442 ぐらいに上がってまして、当時は 440 ぐらいでちょっと低かったんですが その音を記憶することができたんですね。ですから、いわゆる音が狂っているピアノというのがすぐ分かりました。その代わり僕にとっては、1つの曲というのは、そのキーで演奏されないとその曲に聴こえないようなところがあるんですね。

井深 変調すると、もう全く違うものに聴こえる。そういうのって、不自由なのかな？

樋口 ええ。声楽家にもそういう方がいらっしゃるんですが、絶対音を持っている方は、逆に、移調された譜面を歌うのに非常に困難だと言われます。僕も、いまだに、移調されて、そこから実際の音が出てますと、全くその譜面読めなくなっちゃうんです。

井深 どうしてなんだろうね。お腹にいた時に、例えば、お父さんとかお母さんが、そばで何か音楽的なことをした、とかいうことはなかったのかな？

樋口 父もピアノを弾いたり、ヴァイオリンを弾いたりしますが、家系に音楽家の人というのは…実はいるんです(笑い)。でも邦楽のほうの琵琶。母方の祖母が琵琶の先生をやっていたんですが、音楽のほうはそれだけです。特にうちの両親が音楽家に育てようとか、そういう育て方をしたとは思えません。そんなことしてたんでしょうかね(笑い)。

井深 結婚して、待っても待っても子供ができなくて、いよいよそれじゃ養子をもらおうかというところまでいった時に、初めてできた子供ですよ、あなたは。うん、経歴にもやっぱり母 33歳の時に東京で生まれる…とある。

樋口 それは、外国に出す時の資料で、よく女性の厄年とかって言いますでしょう。逆に、その時の子供はラッキーボーンだというふうに外国の方に言われたんで、わざとそれをプロフィールの1番最初に載付けてるんですけど。

井深 だから、ほんとうに待ちに待ったお子さんだったんだよ。お父さんはその頃、ソニーの役

員をしてて、怖そうで有名だった(笑い)。ほんとうに怖い人じゃなかったけど…。それも今はずいぶんやさしそうになった。とにかく、怒られたら「康雄ちゃんお元気ですか」とかちょっと言っちゃえば、怒られないで済んだっていう話があるくらい。でも、お父さんはヴァイオリンが趣味だったって？知らなかったなあ。

樋口 ご存じなかったですか。家では、今でもヴァイオリンを弾いていますよ。ピアノも何だか適当には弾きます。

井深 オルガンを弾くという話は聞いたことがあるよ。

樋口 ああそうですか。僕の記憶では、まずピアノがあって…。

井深 あなたが生まれる前から、ヴァイオリンをお父さんは好きだったのかな。

樋口 ええ、弾いてみたいですよ。

高校生からプロに…

井深 じゃ、音楽的環境はちゃんとあったんだね。

樋口 母方の祖母が音楽をやったというのは、あとで知ったわけです。僕はビートルズ世代でして、小学校、中学校時代にはギターがありました。おばあさんがうちに来た時に、そのギターを弾いたんですね。変な話ですけど、僕、そのおばあさん、あんまり好きじゃなかったんですけど、ギターを琵琶のチューニングにしてすらすら弾いたんですね。非常にびっくりしちゃって、そこからもう全然、祖母への見方が180度変わっちゃった。

井深 尊敬ね。おばあさんで、ギターが弾ける人なんて珍しいものね。

樋口 はい、そうですね。びっくりしました。

井深 僕の母親もお琴をやったけど、チューニングをする 琴柱をあっちへ動かしたりこっちへ動かしたりして音を整えるんだよね。

樋口 僕も、お琴の先生のところに遊びに連れて行かれたことがありまして、その時もう楽器だったから何でも好きだったので、いじらせてもらいました。そしたら、その先生は西洋音楽の調弦をしてくださって、それはすぐ弾けました。

そういえば、本で読ませていただいたんですけど、井深さんのお母様もピアノをなさっていらっしたんですね。

井深 お琴をやって、ピアノもやってた。

3歳からピアノのお稽古を始めてそれから？

樋口 小学校の時は、もっと違う夢がありまして、別に音楽家になりたいと思ってはいなかったんです。でも、ピアノは中学校3年ぐらいまで続けたんですが、そこでポピュラーミュージックに傾倒していったんですね。

井深 それまでのクラシックから。

樋口 はい。具体的には、ビートルズ・デビューがありまして。ファッションをまねるとかそういう感覚ではなかったんですが、やっぱり、ビートルズの音楽がすごく好きになりました。

麻布中学に行ってたんですが、文化祭でそのバンドのまね事なんかをしまして。

そんなことをしているうちに、その時はもうピアノだけではなく、太鼓を叩いたり、ギターを弾いたり…。なぜか楽器はどんな楽器でも弾けない気がしなかったし、実際に、すぐに何でもある程度まではいく。ただし、それ以上はいかないんですが(笑い)。とにかく好きなビートルズの音楽をやってたんです。

そうこうしているうちに、ピアノもやっぱりポピュラーに傾倒してきましたから、インプロビゼーション(即興曲)というか、即興演奏ができるジャズとか、そういうジャンルにいきなり興味を持ちました。学校同士の間で、あすこにピアノをよく弾くやつがいるというので、ちょっと有名になりました。

ちょうどその頃、麻布中学のそばの所に、MRA という組織がございまして。その中に音楽をやるグループがあって、たまたまその人に見出されたというか、ちょっと学校の帰りに遊びにいらっしゃいと言われるようになりました。で、MRA に行きまして、そのバンドの中でピアノを弾くようになりました。

そこで、ポピュラーミュージックをいろいろやってたんですが、そうこうしているうちに、NHK の、今は亡くなられた、「夢で会いましょう」なんかをつくったプロデューサーの末盛憲彦さんに見出されまして…。ピアノを弾いていたバンドはもちろんプロフェッショナルだったんですが、僕は学校の帰りにピアノを弾いていただけだったので、音楽業界ではトラと言いましてね。

井深 エキストラのトラ。

樋口 そのトラでやってただけなんです、NHK のプロデューサーが、「君も一緒に出なさい」と言われまして。学校も行ってたんですけども、いいんですかね、学校に行っているのに、働いたりして。よく分からなくなって。

井深 いけない(笑い)。

樋口 ほんとうはいけないんですよ。それで、NHK の「ステージ 101」という番組に出させていただいたんです。初めは歌なんか歌う気は全くなくて、僕はただピアノが弾きたかっただけなんです、「じゃ、歌も歌いなさい」ということになりまして、歌も歌うことにさせられちゃったんです。

その後すぐに、こういうケースは多分、少ないと思うんですが、キャストとして出たのに、僕は音楽の編曲(アレンジ)とかオーケストレーション(楽器編成法)をしたくなりまして、亡くなられた中村八大さんのお手伝いをさせていただきました。それで、オーケストレーションの勉強をさせていただいた。

八大先生は多分、別におまえに教えた気はない、とおっしゃると思いますが、先生のをを見せていただいて、テクニックを盗ませていただいたんです。

ポピュラーもクラシックも…

樋口 で、キャストから今度はNHKの番組のスタッフになりました。音楽担当をさせていただいたんですけど、多分、最年少じゃなかったかと思うんですね。17、8歳からスタッフになりましたので。

それで、NHKでは、その後「レッツゴーヤング」という番組の音楽を担当したりしたんですが、音楽番組がだんだん少なくなりましたので、今度はテレビドラマの世界に入りました。NHKや民放のドラマのバックグラウンドミュージックの仕事をやるようになりました。

しかし、そもそもの出がクラシックピアノなので、もう1回クラシックピアノの曲をやりたいな、なんていうふうに思うようになりました。その時に、アメリカのMCAミュージックという会社と契約をしまして、少しずつ仕事を始めました。

ほんとうはアメリカで仕事をしたい気持ちもあったんですけど、演奏家だったら世界中どこでも仕事をしていいんですけど、作曲家としては自分のバックグラウンドをいつも大切にしたいと思いました。たとえ外国にいたとしても、僕は日本人で東京で生まれたというのを大事にしようと思ひまして、向こうに渡ったりするのは短期間にしています。

井深 じゃあ、日本でずっとやっているのね。

樋口 ええ、主に日本で仕事しています。まあ、そんなわけで、MCAとはポピュラーミュージックの編曲をするために契約したんですが、やっぱり、どうしてもクラシックみたいな音楽をやりたくなくて…1976年から、弦楽四重奏曲とか、ピアノ協奏曲なんかを自分でこつこつ書くようになったんです。

テレビドラマなんかの仕事も並行してやる一方で、いわゆる管弦楽のための作品というのは自発的に書いていたわけですが、作品ができて発表の場がなくて非常に苦しい。そんな時に、ニューヨークフィルハーモニーの室内楽団の人と偶然に知り合いまして、おまえ、曲を書かないかということになったんです。

外国に行きますと、今でもそうですが、作曲家だと知ると、すぐ「僕はフレンチホルンを吹くんだけど、フレンチホルンのための曲を書いてくれないか」とか、「僕はピオラなんだけど、ピオラの協奏曲を書いてくれないか」とか、僕がどんな作曲家だか分からないのに頼んでくるんですね。

そこへいくと、日本では、作曲家だと言っても、どこの音大を出たとか、先生は誰だとか、コンクールで何番だったとか、そういう話になっちゃう。そういうのとちょっと毛色が違つと、なかなか依頼がありません。外国なら、作曲家は音楽を書く人なのだから、「おまえ、おれのための曲を書け」って、すぐ言われるんですね。

まあ、そんな乗りで、ニューヨーク室内楽団から曲を委嘱されまして、それをニューヨークと東京で同時に発表して、それからこつこつクラシックの仕事を…というようになりました。

その時、同時にヴァイオリンコンチェルトも東京で発表したんですが、偶然に、亡くなられた手塚治虫さんが来てくださって、その曲をぜひアニメーションに使いたいというこ

とになりました。

手塚さんの作品に『火の鳥』というのがあるんですが、その番外編『火の鳥 2772』という映画がございまして、それに僕のコンチェルトを使っていたというようにございまして。それが1981年ですね。もう12年前になります。

井深 学校は上智大学だったよね。音楽大学に行く気はなかったの？それだけ実際に動いちゃうと、そっちのほうが忙しかったわけですか。

樋口 ええ。音楽をやる人には案外そういう人、います。僕の知っている方でも、ヴァイオリンの千住真理子さんなんていう方は、高校生の時に、もう既にビニャフスキーコンクールで4位だったか、賞をお取りになったりしましたが、お父様が慶応の数学の先生だった関係もあってか、音大には進まないで慶応大学に行かれました。僕も、特に音楽大学に入って何かしたいという気は全くありませんでした。もう16からいわゆるギャラを取って仕事をしていましたので（笑い）。

これから学校に行っても何だなと思ひまして、どうせなら、じゃ、商売にも役立つような経済学部をやるよとばかり、上智大学へ行きました。

井深 上智大学は、ちゃんと卒業したんでしょうか（笑い）。

樋口 ちゃんとはできなかったんですが、大学は非常に楽しかったです。大学の中のオーケストラなんかもありましたが、僕は、そういうことには一切かわりませんでした。

井深 大学は学業だけに専念。

樋口 はい、そうですね。とにかく、もう、在学中に会社を興したりしましたものですから（笑い）。その時は、ポピュラーミュージックを売って商売にするような会社をつくりました。

音楽をつくる = レコーディング

樋口 とにかく今、音楽をやるということは、人前で演奏したりすることとか、いい曲を書こうとか、それもそうなんですけど、大体、録音をするということと重なるんですね。特に若い人の中では、音楽をやるということは、レコーディングするということなんです。

それで、もちろん録音機器は素晴らしいものがありますし、楽器はシンセサイザーというのがありますので、手軽に手に入りますから、自分の家でデジタルでマルチ録音 多重録音するというのが、現在の、音楽をつくるということなんです。

昔だったらいいメロディーをつくるとか、いい曲ができましたとかというのが音楽をつくるということだったんですが、今はどうも、レコーディングをすることが、音楽をつくるという意味なんです。

井深 音楽の認識というのが全然違ってきたのね。だから、例えば、ミキシングとかそういうもののほうが大事ということになる。

樋口 そうですね。そんなわけで、作曲もいろいろな方面で、現在も、商業音楽も含めてやりますが、結構、プロデュースという名の、こっちの作曲家をあちらに連れて行くと

か、そういう仕事が多いんで、あんまり名前が出たりはしないんです。

井深 でも、やっぱり、音をつくることを、自分が全部やってこられたから、今度は、これにはどういう音のセンスの人を連れてきたらいいとか、そういうコーディネートができる。誰にでもはできないことだものね。

樋口 はい。ただ、僕も、最初にNHKのプロデューサーにお世話になったんで、その分、若い人たちにお返ししたいと思っていますが、本質的には、最後まで作曲家でありたいとは思っています。

井深 やっぱり、作曲というと、クラシックとかポピュラーとかいうふうに、今もジャンルが分かれているみたいだけでも、つくる方にしてみれば、クラシックをつくる時とポピュラーをつくる時と、意識的な違いってあるんですか。

樋口 多分、言葉の定義の問題だと思いますが…便宜上クラシックとかポピュラーとか言っているだけで。ポピュラーは新しいほどいい音楽だし、逆にクラシックは古いほどいい音楽ですから。ただ、現在の今生まれた作品というのは、やっぱりポピュラーだと僕は思います。多分、皆さんがおっしゃるクラシックとポピュラーの差というのは、いわゆるアコースティック（音響学的）な音楽と、それから非常にエレクトロニクスでシンセサイズ（合成）された音楽との差だと思います。

だから、作曲家はやりたいようにやればいいと思いますし、聴くほうも若い人は、そんなことを気にしながら聴くわけではありませんから。

井深 作曲の過程にしても、いわゆる機械的な音の組み合わせというか、エレクトロニクス的なのかなと思う時がありますからね。

我々には、いわゆるオーケストラに出てくる、ああいう普通の楽器を重ねていった音というのが、音楽の音だと思うみたいところが確かにあるね。シンセサイザーのキンキンキーンというような音で、「いいでしょう」と言われても、なかなか分からないですね。

樋口 でも、いわゆるアコースティックな楽器に関しても、いずれ、革命的な楽器ができないと、ストラディバリだって、アマディーだって、もう2、300年たっているわけですから、あとのどのくらいもつかという問題もありますし。

それから、スタジオなんかでおもしろいと思いますのは、スタジオに必ずピアノがございませぬ。グランドコンサートピアノだと1500万とか2000万もするんですけど、あれの使用料って何百円なんですかね。

それで、シンセサイザーって楽器は、昔は300万ぐらいする機械が、今は30万以下で買えるんですけど、その使用料が何万円もしたりする、というおもしろい現象がありますね。

ただし、楽器を小さい子に習わせるんだったら、やはりピアノがいいと思います。というのは、一応叩けば音が出るということ、音の出し方ということを追って行くと、また違う問題になりますが、万が一、そのお子さんがものすごい演奏家になっちゃった時でも、ピアノを持って歩く方というのはごく少ないわけで、演奏会場にあるピアノを皆さん弾きますし、ピアノを買うとしても1500万か2000万で買えますが、ヴァイオリンは軽くその

10倍やそこらはしますから。

井深 そりゃあそうですね。

樋口 ただ、音楽はやっぱりその裏にある、人間が伝わってくるんですね。もちろん表面的にはいい音が伝わってくるんですが…。だから楽器が変わっても、演奏家が変わっても、やっぱりいい音楽はいいものとして伝わると思います。

そういう意味では僕はウォークマンなんかが出た時に、すぐに飛びつきませんでした（笑）。昔カセットというのがありましたね。語学学習用につくられたりしたのが…あんまり音の良くないので。あの程度の音質でも平気だったのは、特にいい音質を聴きたいわけじゃなくて、そこの中の音楽が聴きたかっただけで…。ですから、ウォークマンとかCDには飛びつかなかったんです。ただ、あんな便利なものはないので、今はちゃんといつも使っておりますが、あまり音質とかには、作曲家はこだわらないですね。

柔軟性のもととは幼児期…

樋口 それにこだわるのは、やっぱり若い方です。特に、音楽を、さっきお話ししました多重録音するような音楽家のタイプの方は…。つまりメロディーなんかも非常に短いシリーズになってきているんですね。今、ミニマルミュージックといいまして、音型をたくさん繰り返すことによって音楽になる、みたいなものもありますから。

すごい感動するような素晴らしいメロディーをつくるというよりも、もっと短いものの継続で音楽をつくっている人が多いので、そうなりますと、それをいかにきれいな音で出すかということが重要な要素になっちゃったんですね。そのためにはシンセサイザーを駆使しまして、自分なりの音をつくるということになってきますね。

だから今は音楽というと、譜面に書かれたものではなくて、現実に聴こえてくるものが音楽。音楽としてはひょっとしたら、それが正しいやり方なのかもしれないですけども。

それまではメロディーと歌詞と和音、コードネームが書いてあるようなもので、この曲はどうですかと言っていたようなのが、1960年代のアメリカンポピュラーミュージックから、デモテープといいまして、実際にどんな音楽か、みんなで聴いて判断できるようなものにしようよということになりました。それがデモテープの起こりで、今はもう、デモテープではなくて、完成された形で若い作曲家の方はつくっていますから。

井深 まず音にしてからね。その一方で書いた譜面で分かるという方式の人もある。

そういうものって、普通に、音楽をスタートしても、クラシックをやりだしたらそこから抜けられない人もいるし…そのフレキシビリティ（柔軟性）って何なのですか。

樋口 そうですね。いろんな音楽家を見ていまして、また音楽家でなくても、やっぱり僕みたいに小さい頃に発想とかひらめきとかを許されて自由に過ごすというか、他の何でもいいんですけども、そうしたことで、あるコツを体得した人は、違う波長があるんです。全然違う仕事を持っている方でも、そのコツを知っている人とは、すぐ話ができるんです。

だから、今おっしゃっていたフレキシビリティの話ですけれども、そのコツを知れば、自分のやってきたもの 例えばクラシックならずうっとクラシックで突っ走らなきゃいけない、ということはないわけです。普通ちょっと道をそれると非常に不安になるわけですが、僕がいつも不安にならないのは、そのコツを知っているからなんですね。だからスポンとクラシックの中にも入っていけるし、ニューヨークフィルに行っても全然驚かないし、ポピュラーも同じ音楽であって、全然僕にとっては変わらないですね。それが多分、小さい時につかんだコツだろうと思います。

井深 それって、どうやってつかんだんだろうね。

つづく

井 深 対 談

直感に導かれて・・・(2)

好きなことを好きなように・・・

井深 鈴木鎮一先生の才能教育のほうに、青木謙幸先生という方がいらっしゃるけど、確か、あの方の息子さんで面白い話がある。

お腹の中にいた時も、同じような環境だったろうけど、生まれてすぐそれも2、3日目からずっと意識してオーソドックスなクラシックだけを環境として育てた。その赤ちゃんが4、5ヵ月になって、周りの誰かが、ジャズを初めて聴かせた時、ワーッと泣いてしまって大変だったんだって。

樋口 ああ、初めて聴かせたら。

クラシックしか聴いたことがなかったということですか。お腹の中からクラシックだけ。生まれてからもずっとクラシックしか聴かない環境に置かれていた赤ちゃんだったんですね。

井深 そうそう。そういう赤ちゃん時代だったんだけど、中学生時代には、やっぱりビートルズやフォークの音楽、合唱なんかに夢中になった。何しろ耳がいいから、何を聴いても、聴いただけで分かる、キーが。

ところがそのうちに自分でどうしてもビートルズに安住できなくて。それでまたクラシックに戻って、今、いい後継者というか、先生になっている。

樋口 じゃ、ジャズで大泣きした赤ちゃんも、一度はクラシックを離れて、他に狂って・・・。やっぱりクラシックに戻っていった。じゃ、そこでその柔軟性のコツを身につけて。

子供というのは突拍子もないことをやりますよね。僕だって、先生に習うこと以外のことをやりたい、つまり先生が教えてくれることをいやだって言いだして、それできつこういうふうになったと思うんですね。つまりバイエルをやりなさいと言われてたんですけども、僕はバイエルはいやだ、さっき聴いた音楽をやりたい、と。もうちょっと年をとっていたら、そういうことはきっとできなかつただろうと思いますし。

井深 それにしても、音を聴いただけで、それが手で弾けるというのは不思議だと思うけど。

樋口 でも、文化人類学では、人間が二足歩行になったいきさつについて、昔は人間も四足で歩いていて、高いところを見るために伸び上がったり、木の実を採ったりすることがあったけれども、そうしているうちに、ある日突然、赤ん坊が立ち上がったという説があるんですね。

井深 何世代目かがね。

樋口 ええ、突然立ち上がった。だから大人はみんな四足で歩いているのが普通だと思っ

も、子供って全然違うことを考え、言いだし、やってみたがる。急にとんでもない、突拍子もないことを言えるのは子供でしょう。

井深 でも普通、親って子供がお稽古を始めて、バイエルがいやだの、決まったことはいやだのと言いだしたら、わがまま勝手だと、悩んだり、怒ったりするよね。どうしたらいいもんだろうかと…。

樋口 例えば立派なピアニストにしたいと思っていたら、きっと悩むと思うんですね、親が。

井深 じゃあ、最初はどのようにしてピアノを習いに行くことになったのかしら。

樋口 多分、父はピアノを弾けるようにしたいと思ったに違いないし、母は特にそういう気もなかったと思うんです。そうして、僕は決められた型通りのピアノの稽古がいやだったし、先生のところに行くのはいやと言いだした。自分で好きに弾いているほうがよかったんです。

それで1人目の先生は、他のことを弾いちゃいかんと言われました。それで先生を代わりました。ところが、2人目の先生もそうで、そのあとに会った先生がやっと、何でも好きなことをやりなさいと言ってくださったんです。だから、2人の先生から首になったわけなんですね、とてもおたくのお子さんはお預かりできませんって（笑い）。

井深 そういう意味ではとてもかわいがって、普通だったらわがままと言われるようなことでも、大事に大事に育てたんでしょ、ご両親は。わがままと思われることもみんな聞き入れて。

樋口 やっぱ、両親が結婚してから16年後にできた子供というのもありますので、そうしたんでしょね。

ピアノだけでなく、僕は父からも母からも、特に教育のことに関して、こうなさいとか言われたことはないんです。何しろ父は仕事が1番忙しかった時代ですし、母はそういう教育的なことを一切言う人ではありませんでしたから。さすがに中学ぐらいからは、ちょっとうるさいことを言われるようになりましたが、小学校の6年間というのは、一切そうしたことはありませんでした。

井深 でも、何も教育に関しては言われなかったというけれども、あの当時から麻布中学・高校というのは進学の大名門校だもの、大変だったでしょう。東大入学者数第何位とか…。

樋口 いや、今のほうが大変だと思います。

趣味もいっぱい…

井深 勉強やって、音楽やって、それでその他にボーイスカウトもやっていたんでしょ。

樋口 ええ。ボーイスカウトは今も関わっています。今度大分でジャンボリー（野営大会）があるんですよ、94年に。その歌を書かせていただくことになりました。

井深 その他趣味もたくさんですか？

樋口 僕はいろんなことをやってある程度になると、もうそれでいい…やめちゃう。例えばコンピューターが入った時は、ベーシックを朝から晩までやりましたし、そんな風にある期

間、本気で・・・何でもやりますね。

井深 変わったのがいいんですか。

樋口 普通から変わったのまで（笑い）。小さい頃はいろんなことをやっていたんですよ。ある時は手品に凝って・・・。上野の何とかという所まで、種を父が仕入れに行ってくれて。それを小学校の時には夏休み、例えば海の家とか、山の家とかに行くと、そこでやるわけです。帽子の中からはばつと鳩が出るとかね。手品が好きだったんですよ。

井深 じゃあ、かなりそれもある期間は本格的に。

樋口 いいえ、ほんとにちょこっとやってすぐやめちゃった。楽器だって何でも好きですから、やったことのない楽器はみんなちょこっとやったり・・・。

井深 手品の次は？

樋口 手品の次はボーイスカウトで西洋のドラムを叩いていました。

井深 ボーイスカウトは幾つから入ったの？

樋口 カブ（小学3～4年）からやっていますから、長いですよ。パレードとか何かの時はドラムをやりましたし、アジアジャンボリーの時も、それで参加しました。

この間、最近のジャンボリーのビデオを見せていただきましたけれども、全然変わらないですね。

井深 変わらないね。恒例のカレーライスも作りましたか？

樋口 はい。私の時は、準備が全部米軍の払い下げで、飯盒なんかにも、US って書いてありました。

井深 野球もやったでしょう。野球のチームに入ってたんですか。

樋口 チームといっても、草野球というようなものです。冬にはスキーも。

井深 それじゃあ、いろいろやりたいことを全部やって、その合間に勉強してたみたいね。随分忙しそうなもの（笑い）。あの頃は、塾なんてなかったの？

樋口 いや、ありましたよ。僕、小学校は塾へ行きました。進学塾も行きましたし、個人の塾にも行きました。塾も楽しかったですよ。夜遅くまで外にいられるし。

井深 好きなことにわくわくしながら、何となく世の中の流れの波にもちゃんと乗ってたんだ。有名な進学校にいても、そんなにガリ勉じゃなかったのね。

樋口 ええ、いろんなことをやっていました。土日はボーイスカウト、それからブラスバンドもやって、エレクトーンも。

エレクトーンは別にそうやりたくもなかったんですが、近くにヤマハのエレクトーンを売るために教室がいっぱいできてきました。興味があって、僕はそこに学校の帰りに遊びにいって弾いてたんです。自分はエレクトーンがなかったんですけども（笑い）。弾いていたら、そこの人に、エレクトーンを貸しますから、コンクールに出てくださいって言われまして、それでコンクールに出たりもしました（笑い）。

井深 でも、麻布中学が個性的な学校だったから許されたのかしら。十代からギャラを取りながら、中学・高校に通うなんて。よそだったらだめでしょう。

樋口 普通はだめですかね、ああそうかもしれないですね。それにしても、暗黙の了解というやつだと思いますが（笑い）。

僕の学年から音楽家になったのが3人ぐらいいます。その時、学年が300人ぐらい、東大に85人ぐらい入っていた時代です。

井深 やっぱり大変だったんだ。

樋口 でも、僕らは麻布としては1番だめな時だったんです、学園紛争とかあった時期だから。僕らの上の学年の人たちは、もっとゴタゴタしてて、一番かわいそうでしたね。多分、今のほうが東大の合格率はぐっと上だと思います。

7歳までの音・・・

井深 それにしても、絶対音感はどうやって身につけられたのかな。その辺が知りたい。

樋口 それは自分では分からないですね。僕にとっては、もうラの音は1つのラの音しかないんですね、昔から。

井深 何で、どうしてそういうふうになったのかしらね（笑い）。

樋口 どうしてついたわけですかね（笑い）。

井深 我々だったら、音程をとるのに、普通、音叉でウーンと鳴らして、その音をとったり、誰かがピアノでポーンとCの音を出して、それでやる。

じゃあ、あなたの場合、音が浮いてきたりしたら、すぐ気持ちが悪くなっちゃうわけですよ。

樋口 そうですね。でも、最近それもやっぱり衰えたようです。

井深 穏やかになったのかしら。まだ年齢のせいではないでしょう。

樋口 それは、管弦楽をやって、いろんなピッチの音を聴くようになったからだと思うんですよ。ピッチは国によっても違いますし、それでだんだん・・・。

井深 その、音がずれると気分が変になるというのは、どういう具合に変になるんですか。

樋口 いやあ、気持ちが悪いんですよ。

井深 食あたりなんかの気分が悪いのと同じに、むかむかするんですか。

樋口 それは何とかしてもらわなきゃ困るというような状態で。とにかく、その音やめてよ、という感じですね。

でも、すべての有名な作曲家が絶対音感があるわけじゃないんですよ、ある方とない方といらっしやる。

井深 子供の時に、ずうっと自分のそばで出ていた音、繰り返し馴染んだ音ってありますか。音楽に限らず、何か音。

樋口 僕の場合、やっぱり、すぐ思い浮かぶのはピアノ。ピアノだと思います。面白いのは、絶対音までいかないですけども、絶対音に近い音感を持つにも個性というか、あるんですよ。

例えば管楽器の方は、Bフラットのドというのがよく分かりますし、弦楽器の人は自分のAの音がよく分かったりするんです。しかし、やっぱり僕は絶対音が最近薄れてきています。

子供の時はものすごく研ぎ澄まされていましたから、音が違うと気持ちが悪くて、ほんとうにどうにもしようがなかったですが。

井深 でも、絶対音感で、データが今出ているところでは、7歳以後は一切身につかない。

樋口 そうかもしれませんね。

井深 そう、そうして限りなく0歳に近づくほど、身につく率が高くなる。

樋口 それは絶対そうだと実感的に思います。

井深 5歳を1として考えると、4歳だとその2倍身につく。それで3歳となると、3倍。それから下は調べようがないから、データはないけれども。逆に6歳になると、5歳で身につくパーセンテージの半分。7歳から以後は一生だめで手遅れになる。そういう絶対音の研究をしている方のデータがある。

樋口 じゃあ、7歳までに身につかなかっただめですね。かといって7歳より前は確率的に高いけれども、放っておいても自然に必ずつくというわけではないんですね。

井深 そうです。

樋口 でも、ひょっとしたら、0歳だったら必ずつくかもしれないですね。

井深 ええ、幼児開発協会では、0歳だったら必ずつくだろうという予測をしてね。

樋口 考えてみると、耳って面白いんですよ。

井深 耳って、お腹の中の5ヵ月から一応聞こえているから。

樋口 耳は聞こえるんですか！

井深 耳はね。五官の中で、目だけは生まれてから。あと何年がかりで完成するといわれています。視力というのは、お腹の中ではあまり必要がないものだけど、明るいか暗いかはちゃんと感じる力があるんですけれどもね。でも、耳は胎内5ヵ月から聞こえているということが証明されているんです。

でも、お腹の中だから、外の音が届いても、羊水を通して、また耳にいろんな液が詰まって、耳管なんかの保護をしている状態だから、聞こえにくいけれども、とにかく5ヵ月から聞こえている。

ほんとうに絶対音感で、7歳からはもうだめで、一生身につかないものらしい。だから、康雄ちゃんのそれはいつついたんだろう。16年ぶりに赤ちゃんができて、お腹にいる時に、何を聴いていたのかな、お母さんは。

樋口 僕はずうっと、みんなにもあるものだ、と思っていたんですけど…。

井深 それは違うですよ、絶対音感はね。

樋口 お腹の中にいる胎児、5ヵ月の時から音は聞こえるということですが、どの程度聞こえるんですか。

井深 音としては相当入るみたいですね。

樋口 そうですか、絶対音は 7 歳以降はだめなんですか。何でだめなんでしょうね。つまり 7 歳までの何か特別な力があるんですね。

井深 それは音感だけじゃなくて他のことも。すべてのものの、ほとんどがお腹の中から始まる、と私は考えています。

心と知力は別・・・

井深 ところで、僕の本はどれを読んできたんでしょうか（笑い）。

樋口 はい。僕はまず『0 歳』から。でも『0 歳』は多分、『あと半分の教育』のイントロダクション的なものだと思いますから。

井深 あれが出たのは、実は逆だったんです。『0 歳』を書こうとって始めた時に、どうしても 0 歳だけではすまないものが出てきちゃって、その『0 歳』からはみ出したものが『あと半分の教育』としてまとめられたんですね。

で、まずあふれたものからすくって、先に出して、それから『0 歳』ということになった。

樋口 『あと半分の教育』のほうは、実はまだちょっと読んでないんですが。

井深 読んでよ（笑い）。

樋口 “心を育てる” “心の教育” の “心” のこと よく英語でメンタルと言いますけれども、あの、メンタルって、心・知力の、とかっていう意味ですが、日本語では、心と知力は違いますよね。それが英語では同じ言葉だというのが不思議ではないです。もちろん心で感じるというのは、頭でも感じてはいるものなんですけれども、日本人は心と知力とは違う、という考え方のような気がするんですね。フィジカル（物）とメンタル（心）その辺、不思議だなと思います。

井深 知力もメンタルですか？英語でいうと。

樋口 そうなんですよ。メンタルテストのメンタルですから。心のとか精神のとか、知力もだけど・・・僕はやっぱり、知と心は違うと思いますね。

日本人って、頭で考えるのとハートで考えるのと分けますよね。

確かに“恋して胸が痛くなる”とあって、心の何かがありますよね、頭だけじゃなくて。

井深 だけど、前に会った『マジカル・チャイルド育児法』という本を書いたジョセフ・チルトン・ピアスという人が、面白いことを言いましたよ。頭は心臓からの指令で考えると・・・。

樋口 僕もそう思うんです。例えば、僕には自己というものがありますね、その自己は、どうも頭じゃないような気がするんですよ（笑い）。

井深 その人が言うには、心臓の心は人間のシンで、だから、心臓で考えるって。

樋口 僕もそう思います、何となく。心臓から脳に命令して、～をしる、と言っているような気がするんです。

音楽を聴くというのもそうだと思います。耳というのは、VU メーターと違いますから、

音量だけとらえるんじゃないくて、例えば向こうで小さい声で話している人がいたら、感度を上げることできるし、音楽の中で、例えばこの楽器だけ聴きたいと思ったら、それだけ聴き分けることもできるんですね。ところが、そのように耳も優秀なんですけど、音楽を聴いた時に、もちろん耳に入って頭で分析するんでしょうけれども、僕はまず、何よりもストーンと心に入っちゃう気がします。

井深 胸に入っちゃう。

樋口 それは耳が多分、とても優秀な機械だからそれができるんだと思うんですが、音楽を聴くと心に入る、ということがあると思います。逆に言えば、音楽にはそういう力があるのだからし…。

つづく

井 深 対 談

直感に導かれて・・・(3)

13.5 秒のひらめき

- 樋口** 僕は広告の音楽なんかもやっているんですが、NTT データ通信の宣伝で、
大脳生理学のスペリー博士の出した、あの CM の音楽は僕がやりました。それとスティーブ
ン・ホーキング博士が車椅子で出て来るあれも僕がやりました。
- 井深** スペリーさんののは、テレビでも見ましたけれども、目からのジャンル、新聞広告で見た時
に、非常に強いインパクトを受けましたね。
- 樋口** あのスペリー教授は、アンモナイトの収集家としても有名で、世界一でかいアンモナイト
を持っているんですね。
コマーシャルの画面の後ろに映っているのは、そこにあった、ご自分の持っている、世
界一大きいアンモナイトなんです。
- 井深** スペリー博士の部屋まで行って？
- 樋口** ええ、そうです。ホーキングさんもそうです。英国のオックスフォード大学まで行って撮
ったんですが・・・。
あの方も、あれは何という病気なんですかね。車椅子で、何もご自分ではできないほど
不自由なんです。
- 井深** 筋ジストロフィーだったかしらね。人間の体は筋肉で大部分成り立っているようなものだ
から・・・あれは大変な病気だね。
- 樋口** もう口もご不自由なので、話すコミュニケーションは機械を使って、声も人工の声なんで
ですが、とってもユーモアのある、面白い方なんです。すごく冗談の好きな方で、好きな音
楽はと聞いたら、マイケル・ジャクソンにマドンナに何とかかんとか。“先生、本当にそ
ういうの好きなんですか”と言ったら、最後に“うそだよ”と・・・(笑い)
- 井深** でも、マイケル・ジャクソンとか、マドンナを知っているということはすごいよね。
それにしても、あの病気は、早く何とかならないものですかねえ、あの偉大なる頭脳
を・・・。
- 樋口** ものすごいですね。英国王立科学アカデミーの、名誉何とかの名簿には、1 ページ目にニ
ュートンがいて、最後に1 番新しいホーキングがいるということです。
- 井深** また絶対音感の話だけど(笑い) 絶対音感が、特別に勉強したり、教わったりしないの
に、生まれた時からあるというのは、やっぱり 10 人の中で 1 人ぐらいじゃないですか。
- 樋口** そんなものですか。それとあと、僕は作曲をやるんですが、作曲も特に習ったというわけ
ではないんです。それでとても不思議だと思っております。

僕は靈魂とかそういうのは否定的なほうなんです、作曲する時にはいわゆるトランス状態になるんですね、自己超越みたいになるんです。考えてみると、昔から母に、おまえはおばあちゃんに育てられたと言われていたんです。その祖母は僕が小学校3年生の時に亡くなったんですが、僕はどうも、ずうっとそのおばあちゃんと交信しているらしい、と思っていたんです。

どんなことが起こるかと言いますと、例えば広告音楽なんかで、こういう感じの音楽を13.5秒にあげてくださいということがあるわけですね。その音楽が一瞬にしてポンとできちゃう、しかも13.5秒にできる、ということがよくあるんです。

井深 13.5秒の音楽が曲の最初から順に1秒ずつ出て来るんじゃないかと、ポンとできちゃう。
樋口 しかも、管弦楽のスコアで、上から木管があって、何があってと、これが一瞬にして絵のようにポンと浮かぶ。これは自分でも不思議だったんです。

だから親しい人には、僕は30%の努力と70%の靈感で作曲をやっているんだ、とか言っていたんですが、それをさせてくれるのは、いつも、その祖母なのだと、少し前まで思っていた。しかし最近になって、どうも違うなと…そしてそれは、こういうことじゃないかと思いだしました。

人の頭の中には、データっていっぱい蓄積されますよね。注文に応じてする作曲というのは、まあ、データで処理できるんです、時間をかければ。だからリアルタイムで構築していけば、例えばそれが10時間かかるものなら、10時間かければできる。ただこれが一瞬のうちにトランス状態のようになってできるのは、何だかそのデータ計算をしている人が、どこか他にいるような気がする。リアルタイムじゃない速度で計算してくれる人が…。だからあたかも自分が10時間後のことを予知したみたいに思えるんですね。

井深 早送りですべてやってくれている人がいると？

樋口 そうですね。スーパーコンピューターみたいに、速く計算しちゃってる、というような気がしてきたんです。だから、それを、きょうもおばあちゃんに来てくれたとずうっと思っていたんですが、この頃、やっぱり自分の頭の中のデータで計算しているような気がしてきました。

そしてよく言われる予知というのも、そういうようなものかもしれないなと。

井深 そうなのって、やっぱりひらめきと言うんでしょう。

樋口 ああ、ひらめきか。

だからそのもとなるものが、多分あるんですね、僕の中に。

井深 何かそういう特別な回路が入っている？

樋口 でも、それも多分、7歳前にしか身につかないんじゃないかと思いますよ。よく分からないんですけど、そんな感じがします。

井深 ずうっと16年。待って待って待ってって感じで、あなたを待ってたご両親の、16年分の思いも入っているかもしれませんよ。

だからやっぱり、そういう気持ちがかもっている赤ちゃんが生まれてきたのかもしれない

いし、それをずっとその気持ちで育てたという…。

難関突破の時代…

樋口 話は変わりますが、物理学は今、面白いですよ。

僕は趣味で物理の研究会のサークルをやっているんですけど、超弦(ひも)理論 スーパーstring理論とか、いろいろあって、世の中はひょっとしたら10年後にはどうなっているか分からない、という面白さがありますね。

友達同士で最新物理学調査会と言って、素人が集まってああだこうだやってるんですが、今、4つの力が統合されようとしている、次々と何か新しいレポートが出てきて、ほんとうに素人の集団なんですが、言いたいことを言いながらやっているんです。

井深 素人だからまたいいんじゃないの。物理屋さんは発想が決まっちゃってるところがあるから、そこを突破しないことには、いずれ物理は頭打ちになる。ニュートンの説明ではもういなくなる…。

樋口 そうですね。その4つの力、大統一理論というんですが、それを研究しているのがプリンストン大学で、そこで4人の教授が研究してまして、今、スーパーstring理論って、すべての物質の根源が振動であるというような理論がありますね。“stringが振動している”ということから、その4人の教授はプリンストン・カルテットというんです。弦楽四重奏。すてきな学者さんなんです。

井深 その方たちはみんな物理学者ですか。

樋口 ええ、そうです。相対性理論をもとにして、ああでもない、こうでもないって。

今、井深さんの物理学も破綻を来すというか、異質な展開をしないと、みたいなお話がありました。音楽の場合も、同様かもしれません。音楽の場合には進歩という言葉では言えないかもしれないですけども、ある漸近線に収束をしている感じがするんですね。2、300年のスケールの問題なんですけども…。科学技術も二次関数の曲線で、双曲線的に収束しちゃっている感じなんですけれども、多分この先、三次関数的に、もう1回発展があると絶対思うのです。それは、これから何百年か、かかるんでしょうけど…そうなることを期待しています。

井深 例えば音楽でも、やっぱりモーツァルトが1700年代の人ですよ。その時の音楽を、今、私たちはまだいい音楽と思って聴いている。常識的に音楽はモーツァルトって思って聴いているんだから…あとはどうなるのかしら。

樋口 現代の作曲家は大変ですね。新作を創る必要がない。というのは、いわゆる名曲とされているものだけで、日本のコンサートホールで毎日違う曲をやっても、1年間のプログラムがつくれるほどあります。となると、新作の入る余地がないというか。

井深 発表する場がない。

樋口 もちろん、作曲家はそれを願い、また積極的に発表すべきなんだろうけれども、結局、

新作をちょっとやって、やっぱり最後はモーツァルトの曲を聴きましょう、というふうに終わりますから。

日本の大変有名な第1級の作曲家と言われる方の場合でも、その方のプログラムだけで、一晩のコンサートを埋めるということはあまりありません。新作を中心に置いて、マーラーで締めましょう、という話になります。

井深 新作だけではお客が来ないわけね。

樋口 そうですね。ポピュラーミュージックだと、また違いますけれども…。

医者になりたかった

井深 また、さっきの話に戻るけど、耳がすごく精巧で、自分の聴きたいものだけをピックアップして聴くことができるというのは面白いですね。

樋口 だから、僕は工事現場の音とか、犬が吠える音とかは全然気にならないんですよ。

井深 そうというのは、シャットアウトできちゃうのかしら。

樋口 ええ、よく虫の声を聴いてそこで情緒を感じたりする、と言いますでしょう。僕はあれは全くないし、それからどんなにうるさくても、その音を除外することができるんです。だから、うるさくていやだな、ということはあんまりないですね。そういう音は聴かなきゃいいというか、その中で聴かなくすることができるので。

井深 集中力かしらね。

樋口 そうかもしれないです。

井深 ところで、結婚はどうしたの？

樋口 いいえ、残念ながら、まだしてないんです（笑い）。

井深 そうだろうね。それだけ好きなことを自由にやってたら、それを理解して分かってくれる女性でないと、なかなかつき合いきれないね。でも、それがお父さんの心配と不満の種じゃないの。話を聞いていると、かなりとぎすまされたというか、わがままというか、楽しく好きなことをやっている感じだから…。

じゃあ、現在は 音楽はもちろん好きな仕事でしょうけれども、物理ですか。その他にも好きなことってなんですか。

樋口 すごく傲慢な言い方をしますと、今はどちらかと言えば、音楽は嫌いなんです。なぜかという、これだけ仕事でやっていますので、音楽を聴いてリラックスしたり、楽しんだりする時間というのはほとんどないんですね。もしか僕が別のことで稼ぎがあって、音楽を趣味でしたら百倍ぐらい楽しいと思います。

ほんとは音楽は大好きなんです、仕事にしているので、非常に複雑な思い。

井深 それが仕事になっちゃったというのは、行きがかり上？気がついたら仕事になっちゃったと。

樋口 そうですね。

井深 人の縁みたいなのにつながって、すごく自然にきちゃったみたいだね。

　　したいしたいじゃなくて、頼まれているうちに仕事になっちゃったという感じ。ほんとうは何になりたかったの？（笑い）

樋口 僕はずっと医者になりたかったんです。切ったり張ったりするのは全く平気ですから。小学校の3年生の時に、父が8ミリを持っていましたので、それを借り出している撮るのが好きで、やっているうちに、どうしても手術をしているのが見てみたくなりました。それで、自分1人である日病院に行って、すみませんけれども、盲腸の手術でも何でもいいですから、手術を見せてくださいと言ったら、盲腸の手術を見せてくれました…。

井深 随分いい人が（笑い）いっぱい周りにいたんですね。

樋口 多分、8ミリを持ってたから見せてくれたんだと思うんですけども。そういうのが好きで、ずっと医者になりたかったんです。

井深 じゃあ、1つ間違えば、産婦人科か外科のお医者さんになってたかも分からないね。

樋口 はい。ただ、人のを切るのは平気ですけども、切られるのはだめですね（笑い）。僕は30過ぎてから盲腸になっちゃったんですが、いろんないきさつがありまして緊急を要する手術になりました。局部麻酔をかけましたが、僕もけっこう酒飲みなほうなので、麻酔が途中で切れちゃったんですね。夜中の2時、お腹が開かれたまま麻酔が切れちゃって、全身麻酔に切りかえるにしても、真夜中ですから麻酔医がいないんです。麻酔医を呼ぶまで、お腹開いたままですよ（笑い）。また、その盲腸が大きくて、研究室行きだったんですよ。

井深 面白いね。話を聞いていると…。

社長さん = 井深さん

井深 それにつけても、あなたのお父さんとはもうほんとうに長いね。ソニーを始める前からだもの。ソニーの前の前の会社、七欧無線というところから一緒にやってきたんだから…。まあ、私の分身のような組み合わせ。ほんとうに何でもよくやってもらった…。

樋口 そのせいでしょうか。僕にとっては、やっぱり井深さんというと社長さんというイメージですね。それはいまだに、何といっても井深さん（笑い）。世の中に社長さんはいっぱいいらっしゃいますけれども、僕は社長さんという言葉を見ても聞いても、井深さんをすぐイメージするんですね。だから自分にとって社長さんというのは1人しかいないわけで（笑い）。

　　ところで、『0歳』の中に、右脳と左脳のお話がありましたが、芸術的なセンスというのはどちらなんですか。

井深 右ですね、芸術センスは。

樋口 やっぱり右ですか。僕は右しか働かないみたいです。よく、音楽家だから耳がいいだろうから、語学なんかもすぐ習得できるだろうと言われるんですけども、そんなことない

ですね。耳がいいのとは関係ないですね。

井深 しかし、ただ耳がいいだけじゃあ、13秒半の音楽が絵のようにぱっとは出ないでしょう。

語学は要らないよって、自分でふたしちやってるんじゃないの。やろうと思えば、いい耳で発音はよく聞こえるんだから。今でもやっぱり、日本が一番好きですか。

樋口 ええ、僕は日本が好きです。

しかし、現在はどこへ行ってもいいと思っています。昔は、どうしても日本をベースにしてと 例えばアメリカのことを考えますと、音楽家がアメリカに行ってお金を置いてくることばかりしてるんですね。

僕はできたら日本にいて、アメリカからお金をとりたかったんですね。作曲家だから、自分のアイデンティティーが日本にありますから、常に日本をベースにしたかったんですけども。演奏家だったら、世界じゅうの舞台でできますし、日本人で西洋音楽をやっている演奏家というのは、また大変だとは思いますが、差別というのはないですし、どの国の方が西洋音楽をやってもいい。

ただ、作曲家は、自分がどこで生まれて、どこで育ったというバックグラウンドを絶対引きずっていきますから、ニューヨークに住んでも日本人である僕が作曲している、というふうにはしたいなと思いますよ。

井深 どこかへ行っちゃったら、お父さん方が寂しがるでしょう。そういう絆の重しはないの。

樋口 だって、今も家は別で離れているんですよ。

井深 でも、例えば子供が中学とか高校ぐらいになって、さあ、どちらへ進むかと相談を受けたら、やっぱり自分のやってきたものに継ぎ足して行ってほしいなと普通思うんだろうけれども、それを考える前に、もう音楽に出合っちゃったんだね。

樋口 僕は父のバックグラウンドというのは、あまりよく分かりませんが、父もやりたいことをやらせてもらって、今になっただけなんです。ほんとはお菓子屋さんを継がなきゃいけない、とかいう立場だったらしいんですが。

井深 そうですか！それは初めて聞いた。

でも、16、7から、ちゃんとギャラをとって、好きなことをやってきたということは、親としてはやっぱり安心なことだったのかなあ。

樋口 いや、逆に心配だったと思うんです。いわゆる堅気だとは思っていなかったようです。つまり、電機屋さんの常識から言えば、音楽は堅気ではなかった。

井深 それはそうだね。

樋口 芸術家は常にどんな身近な人の批判の的にもなりますから、それはまた批判してもいいわけで、最愛の人と思ってこの曲を、と創っても、何こんなのよくないじゃないのという権利は相手にあるわけですから。その批判はいつもこれから先も受けなきゃいけないんで、そういうのは何を言われても聞きます。

ましてや、ソニーには大賀さんがいらっやって“音楽とはこういうものだ”みたいな見本があるから、父にとって僕のやっていることなんていうのは、まだまだ！

ですから、僕は父にこういう音楽を創ったとか言ったこともないですし、僕がやっている番組についても何にも言いませんので、ドラマやCMも、たまたま見たら名前が出てきたということのようです。

井深 楽しかった。今後とも楽しみながら、良い仕事を進めてください。今日はほんとに忙しいところをありがとうございました。

おわり